

18 大脳半球剔除術後45年のCT像と剖検脳

— 剔除脳と剖検脳の再会 —

高橋 英明・田中 隆一・柿田 明美*

高橋 均*

新潟大学脳研究所脳神経外科

同 病態神経科学部門病理学部門*

患者は、5歳のとき右間代性痙攣にて発症し、7歳時には全身間代性痙攣となった。入院は9歳の時で、抗痙攣剤も効果なく、性格も粗暴となり、知能低下、軽度右顔面神経麻痺を認めた。右の痙攣性麻痺があり、運動時には不随意運動を伴っていた。昭和31年9月29日に中田瑞穂教授の執刀に

よる左大脳半球摘除術が静脈麻酔下に施行された。この手術が16mm映画として記録が残っていた。

術後、患者は抗痙攣剤の服用なしでも発作は起こらなくなり、温和な性格となって就学した。

摘除脳は詳細に検討され、脳研に保存されていた。2001年11月患者さんが亡くなられ、近医にて解剖された後、脳研神経病理へ剖検脳が届けられた。

標本センターにおいて、剖検脳と摘除脳が一つの標本ビンに収められた。手術後45年目のことである。